



2018年度
FUJITSUファミリー会 秋季大会
記念講演

長野オリンピック スピードスケート
女子500M 銅メダリスト

岡崎 朋美 氏

Profile

おかざき ともみ 1971年9月7日、北海道生まれ。小学3年のときにスケートを始め、高校卒業後、名門・富士急行に入社。先輩・橋本聖子と共に練習を重ねる。冬季五輪には1994年リレハンメルから2010年バンクーバーまで5大会連続で出場。1998年長野大会女子500Mで、日本女子短距離初となる銅メダルを獲得し、「朋美スマイル」で日本全国の人気者となる。2007年に結婚、2010年に出産を経験。2013年末に現役を引退し、現在はスピードスケートの普及など幅広い活動を行っている。

どこまでも挑戦

スピードスケートへの 挑戦の始まり

早いもので長野オリンピックから今年でちょうど20年になります。私にとって長野県は、オリンピックで初めてメダルを獲得した思い出の地です。そこで今回は、私のこれまでのスケート人生を振り返りながら「どこまでも挑戦」をテーマにお話しさせていただきます。

私は、北海道斜里郡清里町という人口わずか5,000人ほどの小さな町で、3人兄妹の末っ子として生まれました。そこは、冬場になるとマイナス20～25度になる雪深い所です。そんな極寒の環境の中で、自由奔放にすくすくと育ちました。

スピードスケートは小学校3年のときに始めたのですが、近くにスキー場もなく、冬にできるスポーツとしてはスピードスケートしかなかったこともあり、小学校の校庭に水を撒いて作った天然のリンクで毎日のように滑っていました。これが私のスケート人生の原点です。

最初のうちは、特にスピードスケートが好きだったわけではありません。しかし、根が負けず嫌いな私は、出場した大会で負けると悔し

く、また、たまに優勝すれば、そのときの高揚感が忘れられずに、次第にスケートにのめり込んでいきました。とはいえ、中学校、高校ではまずまずの成績は残したものの、なかなか一番になることができず、くすぶっていました。そんな私を大きく変えたのが、実業団への入部でした。

憧れの先輩を目標に 自身の限界に挑戦

私の当時の成績は、良くてインターハイ4位といったレベル。このままでは大学や実業団からは声がかからないのではと思っていた矢先のことでした。スピードスケートの名門・富士急行から声がかかったのです。富士急行といえば、あの橋本聖子さんが所属する実業団。ほかにもたくさんのオリンピック候補選手が所属する超名門チームです。

話をいただいたとき、最初はびっくりしましたし、周囲からはレベルが違いすぎてついていけないからやめたほうがいいと言われました。でも、私にとっては、なかなか勝てない自分を変える大きなチャンスです。ここで逃げずにチャレンジすればもっと強くなれるのではと考え、勇気を

出して挑戦することに決めました。

確かに、富士急行でのトレーニングは苛酷でした。練習場のある富士吉田市は海拔700Mの高所であって、しかも湿度が高いため、少し動いただけで息苦しくなります。しかも、橋本聖子さんらトップ選手の練習量は半端ではありません。苦しくて泣いてしまう毎日でしたが、なんとか頑張っただけで喰らいついていくうちに、少しずつ実力が付いてきて、入社3年目でようやく世界選手権のメンバーに選出。諦めずに続けてきたことで、ようやくオリンピックへの道が見えてきました。

初めてのオリンピック出場 そして初めてのメダル獲得へ

初めて出場した1994年のリレハンメルオリンピックでは、無我夢中で全力を尽くした結果、順位こそ14位でしたが、当時の自己ベストを更新する滑りができて、初めてにしては上出来だったと思います。

このときに印象に残ったのが橋本聖子さんです。日本女子スピードスケート界を牽引してこられた大先輩でもあり、憧れの人でもある橋本さんと一緒にオリンピックに出場できたことは、かけがえのない経験で

した。この大会が橋本さんにとって最後のスケートレースとなったのですが、その滑りを見て、若い自分たちにバトンを渡していただいた気がして、これからは自分たちが引張っていくんだという強い自覚と責任感が芽生えました。

そんな「やってやるぞ」という強い気持ちで望んだ1998年の長野オリンピックでは、女子500Mで念願のメダルを獲得。地元開催で注目度も高く、女子短距離では初のメダルだったので、周囲は想像以上に喜んでくれました。しかし、私自身は、銅ではなく金メダルを目指していたので結果に満足できず、「まだまだ成長できるのでは」という気持ちでした。

というのも、大会の約1年前に導入された新しいスケート靴（スラップスケート）に慣れるのに苦労したからです。このとき金メダルを獲ったルメイ・ドーン選手とは何度も対戦し、負けたことはありませんでした。それが、スラップスケートになったとたん急にタイムを伸ばしてきたのです。「自分ももっとスラップスケートを滑りこなせば」という悔いが残り、「次回こそは」と挑戦する気持ちになったのです。

手術を乗り越え、5大会連続オリンピック出場へ

長野オリンピックが終わり、2002年開催のソルトレークシティオリンピックに向けてトレーニングを続けていた私は、2000年に椎間板ヘルニアという大きな怪我に見舞われました。すでに年齢も30歳を超え、それまでの疲労が少しずつ蓄積していたのだと思います。

そこで大きな決断を迫られました。腰の痛みをなくすには手術が必要でしたが、手術をして復活した選手は過去にいなかったのです。このとき、すでにオリンピックにも2回出場し、メダルも獲ったし、引退と

いう選択肢もあったと思います。でも自分としては「まだやれる」という気持ちのほうが強かった。大いに悩みましたが、思い切って手術を決断しました。

大会まではあと2年、手術後は時間との戦いでした。すぐに退院して、トレーニングとリハビリを平行して行い、オリンピックの最終選考会にぎりぎり間に合い、なんとか出場選手に選ばれました。本番のソルトレークシティではメダルは逃しましたが、怪我を乗り越え、500Mで当時の日本記録を出すことができました。

その後も、オリンピックへの挑戦は続きます。2006年開催のトリノオリンピックでは、日本選手団の主将に選ばれ、500Mでは4位入賞を果たしましたが、あと一歩でメダルだっただけに悔しさの残る大会となりました。その悔しさをバネに、5大会目となる2010年のバンクーバーオリンピックにも出場。成績こそふるわなかったものの、開会式では旗手を務めさせていただきました。

出産後も挑戦、引退後も挑戦の日々

2007年に結婚した私は、2010年に子供を出産しました。しかし、これで岡崎も引退するだろうという周囲の予想をよそに、私自身は出産後も2014年開催のソチオリンピックを目指すと決めていました。「子供を生

んでママさんになっても挑戦できる」ことを証明したかったからです。

出産後は、子育てとトレーニングの両立に苦労する日々が続きました。精一杯頑張りましたが、結果として選考会で落ち、残念ながらソチへの出場はかないませんでした。しかし、これ以降少しずつ増えていった「ママさんアスリート」の先駆けとなれたのではないかと思います。

こうして私は、2013年について現役選手を引退しましたが、それで挑戦が終わったというわけではありません。現在は、主にスピードスケート普及のための講演活動などを行っています。私にとってはそうした活動も初めての経験ですし、娘は現在小学2年生ですが、日々の子育ても、試行錯誤を繰り返す毎日です。まさに「どこまでも挑戦」の毎日を過ごしています。

私は、よく皆さんに「どうしてそこまで長く挑戦を続けることができるのですか」と聞かれるのですが、スケートはもちろん、どんなことでも「まだまだ成長する余地がある」と感じているからです。逆に、どんなことでも自分で勝手に限界をつくって諦めてしまえば、そこで成長はストップしてしまいます。ですから、常に自分自身でやりたいことや目標を見つけて、それに向かって果敢に挑戦し続けることが、人生にとって何よりも大切だと思います。

